2024年2月 25 日 久宝教会 受難節第 2 主日礼拝メッセージ

「ひっくり返せ!」　　水谷憲牧師

聖書　マルコによる福音書 11章 15−19節

2 月 14 日に、キリスト教の暦は「受難節」に入りました。本日はその受難節第 2 の主日ということで、イエス・キリスト最後の 1 週間の 2 日目、エルサレム入城の翌日にイエスがエルサレム神殿から商人たちを追い出すという記事を、共にお読みいたしました。過越の祭りを間近に控えたエルサレムは、あらゆる地方からの参拝者でごった返していたことでしょう。かつてイエス・キリストが 12 歳になった頃に両親と共にエルサレムに上り、帰りにはぐれて迷子になったのも、この過越祭でした。私も昔知人に誘われて、西宮神社の十日恵比寿に連れて行ってもらったことがありました。3 日間で 100 万人の参拝者が訪れるという、非常に大きなお祭りで、もうもみくちゃで前に進むのも大変だったことを思い出しますが、過越祭もちょうどそのような感じだったのかなあと想像するわけです。

しかし、西宮恵比寿やその他のいわゆる初詣と呼ばれる行事が、例えば家内安全・商売繁盛・受験合格などの具体的祈願を目的をしていたのと違って、エルサレム神殿に参拝に来る何十万とも百万とも言われる巡礼者たちの目的、特に過越祭における参拝者たちの目的は、遠い昔にエジプトの地で虐げられていたユダヤの民を、エジプトに対する 10 の災いをもって解放して下さった「出エジプトの出来事」を記念して、神様への感謝をささげること、神様に喜ばれる捧げ物をすることでした。もちろん、神社への参拝者もお賽銭は献げるだろうし、エルサレムの巡礼者たちも自分や家族の幸せ、また神の守護を祈ったことでしょう。しかし、それぞれがどちらに重心を置いているかと言えば、神社への参拝者は賽銭よりも祈願に重心を置いており、エルサレム巡礼者は祈願より奉献、つまり献げ物を献げることに重心を置いていたと言えるでしょう。旧約聖書の申命記 16 章には、過越の祭を含めたユダヤの三大祝祭日について書かれてあります。「男子はすべて、年に三度、すなわち除酵祭、七週祭、仮庵祭に、あなたの神、主の御前、主の選ばれる場所に出ねばならない。ただし、何も持たずに主の御前に出てはならない。あなたの神、主より受けた祝福に応じて、それぞれ、献げ物を携えなさい。」ユダヤには除酵祭（過越祭）・七週祭（五旬祭）・仮庵祭と、年に三度の大きなお祭りが祝われ

ておりますが、これらの祭りで最も大切なことは、献げ物をもって神様の御前に出ることだと言われているのです。神様を礼拝するということは、神様が定められた時に、神様の定められた場所で、心からの献げ物を携えて神様の御前に進み出ることなのだと。さらに申命記 17 章にはこう記されています。「いかなる欠陥であれ傷のある牛や羊を、あなたの神、主にいけにえとしてささげてはならない。それは、あなたの神、主のいとわれることである。」病気や傷ついた動物を捧げ物としてはいけないというのです。これも、ただ献げものを献げればいいというのではなく、心を込めて献げるというところにポイントがあります。自分には良いものをとっておきながら、神様にはどうでも良い余りものを持っていくという心では、とても神様に喜んではもらえない、ということなのでしょう。「それは、あなたの神、主のいとわれることである」神様にとっては、それは気の悪いことであると。

さて、イエスがエルサレム神殿の境内に入った時、そこには過越の祭を祝う大勢の巡礼者が、ユダヤ全土、あるいは世界各地から集まっておりました。この人たちはみな、先程申し上げたように、神様に喜ばれる献げものをするために来たのです。そして本来ならば、皆自分の家から献げものの家畜を連れて来るところなのですが、それでは現実的に大変な苦労が伴うわけです。牛や羊を引き連れてくるだけでも大変であろうに、例えば、せっかく傷のない健康な家畜を連れてきたのに、旅の途中で病気になったり、怪我をしたりして献げものとしては役に立たなくなるかもしれない。そういうもしもの時のために、神殿の境内では健康な羊や鳩を売る店が出ておったわけです。

また、境内には他に両替商もありました。当時の人々が普段の生活で使っているお金はユダヤを支配下に置くローマの貨幣であったのに対して、エルサレム神殿で献げる献金はユダヤの貨幣に限られていたので、みな手持ちのお金をユダヤの貨幣に両替する必要があったわけです。まあそんなふうに、神殿での献げものを販売する業者や両替商の存在というものは、遠くの地から長いこと旅をしてやってくる巡礼者たちにとっては、実際のところ大変便利な存在であったことでしょう。しかし、その一方で、エルサレム神殿は、これらの業者たちから場所代を徴収していましたし、業者たちもそれを踏まえた上で価格を設定して儲けていたのです。

ある資料によりますと、両替の手数料は十分の一から六分の一を取られたそう

です。1000 円神殿に献金しようと思ったら、両替の手数料が 100 円かかったわけです。また、献げ物の鳩の値段も、神殿の外で買う 15 倍の値段であったともいいます。鳩もいざ買おうと思ったら、値段はピンからキリまであって、安くてだいたい 3000 円くらいだそうですが、それが神殿で買おうと思ったら 45000 円になっているというわけです。そもそも鳩というのは、本来羊や牛を献げなければならないところを、貧しい人々のために律法で特別に定められた例外的な献げ物であったわけです。しかし、彼ら業者は、そんな貧しい人々が精一杯の献げ物をしようとする時に、15 倍もの値段で売りつけていた。これは、貧しい人々に対する神様の御心・神様の配慮を踏みにじる行為ではないか。貧しい巡礼者たちは、高いなあと思いながらも、この日のためにためていた貴重なお金を、黙って彼等に支払っていたのでしょう。イエスが両替人の台や鳩を売る者の腰掛けをひっくり返したのは、そのような搾取の現実を目にされたからだったのかもしれません。

また、イエスが怒って境内で売り買いしていた人たちを神殿から追い出した理由がもう 1 つ考えられます。エルサレム神殿の境内というのは一つではなくて、何重にも重なっていました。一番中心に本殿があり、そこは「イスラエルの庭」と言う、イスラエル人の成人男子だけが入ることのできる場所でした。その外には「婦人の庭」と呼ばれる庭があり、イスラエルの女性がもっとも聖所に近づけるのは、この庭でした。さらにその外にかなり広めの「異邦人の庭」という敷地がありました。ここは異邦人でユダヤ教に改宗した人たちが礼拝する場所でした。あるいは体に障害を持つ人なども、異邦人と同じようにここで礼拝をすることになっていました。イエスがひっくり返した店が並んでいたのは、この「異邦人の庭」にあったとされています。

つまり、イエスが怒ったのは、異邦人たちの祈りの場所である「異邦人の庭」が、騒がしい市場と化していたからでした。イエスが「こう書いてあるではないか。『私の家は、すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである。』」と言われるように、異邦人たちの礼拝の場をユダヤ人たちは、自分たちの礼拝の準備のための商売の場にしてしまって、異邦人たちへの思いやりを全く失ってしまっていたのです。自分らは献げものを買って両替をして、自分たちが入っていける神聖な場所で静かに礼拝することができるけれども、がやがやと商売をしておる場所で礼拝を献げ

ざるを得ない異邦人たちはどうなるのか。静かな礼拝の場・祈りの場というものが確保されていない。それがイエスには許せなかったのかもしれません。貧しい人々から暴利をむさぼるやり方、そして異邦人や障害者の祈りの場所を占領して配慮もなくわいわいと商売する有様を見て、イエスは「あなたたちは神殿を強盗の巣にしている」と憤られ、数々の商売道具を蹴飛ばしひっくり返さずにはおれなかったのですきっと。今日のこの「神殿から商人を追い出す」という出来事には、そういう背景があったことを思うわけです。

キリストは、自らが十字架につき犠牲になったことによって、私たちをあがなってくださいました。だからもはや今私たちは神様に対して羊や牛、鳩のような命の犠牲をささげる必要はない。私たちはただ日ごろから多くいただいている様々な恵みを、この世の宝という形で少しずつその都度神様に感謝の気持ちとしてお返しするだけでよい。後はそれを神様が御心に適うようにお使い下さるから。そしてそれはさらにまた私たちに違った形で返ってくるから。あとは私たちは、キリストが「礼拝の場というものをどう考えているのだ」という問いをこの事件によって私たちに対して投げかけられたように、礼拝とは何か、礼拝の場とはどういう場であるべきなのか、特に今はインターネットを通じてつながって下さっている方々もおられますから、共に礼拝を守る、とはどういうことなのか、どうしたら離れた場にある方々とも共にあって豊かな礼拝、力ある礼拝を守ることができてゆくのか、ということなども、また改めて問い直しながら、毎週やってくる主日、新たな気持ちで礼拝を神様に向かって献げていく、そういう者となっていけたらと思っています。